

商船高等専門学校の女子学生における デート DV に関する意識調査

若松 純子*

Dating Violence among Female Students at National Institute of Technology, Yuge College

Junko WAKAMATSU*

Abstract

This study examined the level of knowledge of dating violence(DV) among Yuge College students. By analyzing questionnaires used to survey student attitudes towards DV, the following three things were highlighted. First, the more misinformed the students were about DV, sexually transmitted diseases and contraception, the less knowledge they had about sex. Second, the level of harm to female students caused by DV was proportionate to their lack of knowledge of sex. Third, student knowledge on DV improved after having taken a lecture on DV. It is necessary to continue such lectures to give students accurate knowledge about DV.

1. はじめに

交際期間におけるパートナー間の暴力であるデート DV (dating violence) が近年社会的に問題となっている。デート DV は、配偶者間の暴力である DV (domestic violence) の予備軍であり、内閣府 (2012) の調査によると 10 代から 20 代の頃に、女性の 13.7%、男性の 5.8% が交際相手から身体的暴行、心理的攻撃、性的強要のいずれかをされた経験があると答えている¹⁾。デート DV に関する知識が乏しいと、どの行為をデート DV と認識するかどうか分からず、加害者や被害者になっ
ていても、デート DV であると気付かない可能性がある。そして、親密な関係の中での暴力は軽く考えられたり、原因は被害者にあると判断されるなど、知識が乏しい関係者から理解されず援助の手が差し伸べられない問題が考えられる。また、性行動自体はきわめて個人的なことではあるが、経済的に自立してない学生の性交が特殊なことではなくなっていること、意思の疎通が不十分なままの望まない性交はデート DV につながりやすいことが、われわれに危惧を抱かせる。

そこで、本校 2 年を対象として DV 未然防止講演会を開催した際に、質問票を用いたデート DV に関する調査を実施した。また、女子学生全員を対象として性

やデート DV に関する調査を実施した。本調査では、量的調査から統計的に解析することでその実態を明らかにし、今後、健康教育においてこの問題を取り扱う際の留意点を考察することを目的とした。

2. 調査方法

2. 1 調査対象

デート DV に関する調査は、本校 2 年の学生 115 名 (女子 17 名、男子 98 名) を対象とした。2014 年 6 月 26 日、ホームルームを活用して DV 未然防止講演会を開催し、出席した 2 年に講演会後に調査した。

性やデート DV に関する調査は、航海訓練所実習中の学生等を除く女子全員 102 名を対象に 2014 年 8 月 5 日に実施した。なお、高等専門学校である本校の女子学生の占める割合は 17.9%、内訳は商船学科 8.9%、電子機械工学科 5.3%、情報工学科 37.6% である。

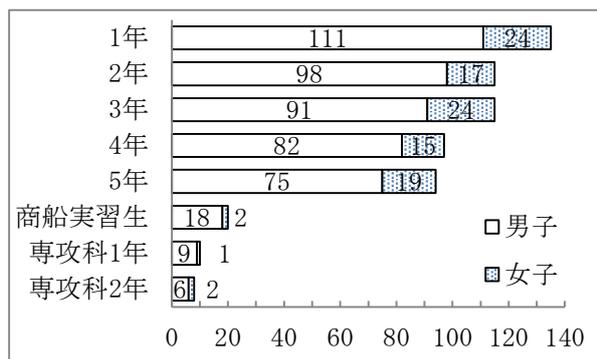


図1 調査対象である全学生の男女別学年別人数

2. 2 主な調査項目

2. 2. 1 2年のDVに関する調査

用語の認知度(DV、デートDVの言葉を知っているか)、DVに関する知識(デートDVの代表的な行為について暴力と捉えているか、講座受講前後のDVについての認知の変化)、DVの経験(加害、被害経験の有無を、具体的な行動から確認)など

2. 2. 2 女子のDVや性に関連する調査

性に関する情報の入手先、性に関して知りたい内容、性交についての考え方、性交の位置づけ、DV・社会的性差についての考え方、性交の状況、デートDV経験の有無、デートDVの内容など

3. 調査結果と考察

3. 1 調査票の回収率

DVに関する調査票の回収数は、対象の2年115名中の112名(男子96名、女子16名)、回収率97.4%であった。

性交に関する調査票の回収数は、対象の女子102名中の51名、回収率50.0%であった。

3. 2 DV、デートDVの用語の認知度

DVは、2年男女の94.6%以上が「知っている」又は「言葉くらいは聞いたことがある」と回答し、「知らない」は5.4%(6名)であった。しかし、デートDVは、「知らない」という回答が61.8%、「知っている」又は「言葉くらいは聞いたことがある」と回答した人が38.2%であった。

横浜市の意識・実態調査(2008, p.6)によれば、高校生の内DVという言葉を知っているのは68.1%であるのに対し、デートDVという言葉になると13.6%²⁾と割合がかなり減っており、本調査も同様であった。

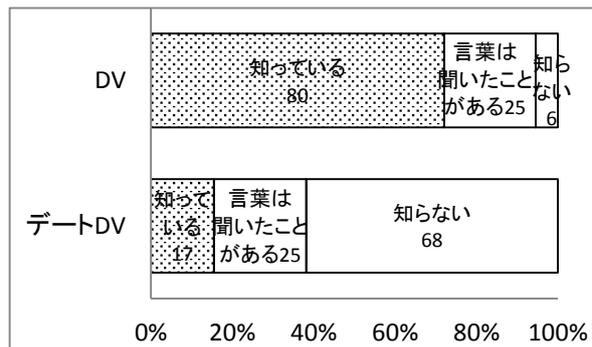


図2 DV、デートDVの言葉を知っているか

3. 3 デートDV行為の認知度

「殴る蹴る、物を投げつける」ことをデートDVと思う2年男女は、講座受講前は72.5%であったが、受講後は84.3%に増加した。「暴言をはいたり、交友関係や携帯電話の内容を細かくチェックする」ことは50.5%から83.3%に、「嫌がっているのに性的な行為を強要する」ことは75.2%から88.9%に、「お金の支払いや高価なプレゼントを強要する」は51.4%から81.3%に増加した。

暴力には、殴るなどの身体的暴力だけでなく、性的、心理的攻撃や、経済的威圧も含まれる。交際中のデートDV行為は、「愛情の証」、「付き合っていれば当然」などと暴力として認識されにくいのが、DV未然防止講演会の受講前と受講後では具体的な各行為の捉え方が変化した。デートDVは愛情表現とは異なるということを含めて、デートDVの各行為についてのより具体的な説明が必要である。

3. 4 デートDVの加害経験・被害経験

2年女子16名中13名(81.2%)、2年男子の96名中34名(35.4%)に交際相手がいる又は過去にいたことがあった。

交際相手がいない者と無回答者を除外した2年男女47名の内、デートDV加害・被害経験の具体的な各行為を1名から4名が経験していた。

全女子学生対象の調査では、51名中6名にデートDV被害経験があり、1名に加害経験があった。

デートDV被害経験の内容は、「自分の携帯電話のメールをチェックされたり、友達との付き合いを止められた」、「ばかにされたり傷つくような暴言をはかれた」が3名、「嫌がっているのに性的な行為を強要された」が2名、「殴る蹴る、物を投げつけられるなどした」が1名だった。

表1 2年男女のデート DV 行為の認知度
および被害経験・加害経験

| | | | お金の 支払や 高価なブ レゼント を強要 | 嫌がっ ているの に、性的 な行為を 強要 | 暴言、交 友関係、 携帯電 話の 内容 チェック | 殴る蹴る ものを投 げつける |
|--|-----------|-------|-----------------------------------|-----------------------------------|---|----------------------|
| | | | | | | |
| それが デート DV だと 思っ て いたか | 講座 受講前 | 思う | 56 | 82 | 55 | 79 |
| | | 思わない | 33 | 10 | 35 | 10 |
| | | わからない | 20 | 17 | 19 | 20 |
| | 講座 受講後 | 思う | 87 | 96 | 90 | 91 |
| | | 思わない | 8 | 4 | 9 | 10 |
| | | わからない | 12 | 8 | 9 | 7 |
| 具体的 な内容 ごとの 被害 経験・ 加害 経験 | 加害 経験 | ある | 2 | 2 | 3 | 2 |
| | | ない | 43 | 43 | 44 | 44 |
| | | わからない | 0 | 2 | 2 | 1 |
| | 被害 経験 | ある | 1 | 1 | 4 | 3 |
| | | ない | 45 | 43 | 42 | 43 |
| | | わからない | 0 | 1 | 0 | 0 |

3. 5 性交についての女子の考え方や価値観

性交に関する価値観を尋ねる問いでは「愛情表現」が女子 51 名中 31 名 (60.8%) と最も多く、次に「子供を作るための行為」が 21 名 (41.2%) であった。

性交や性交についての情報源を尋ねる問いでは「友達・先輩」が女子 51 名中 35 名 (68.6%) であり、最も多かった。情報源として学校か親を選択しなかった女子は 34 名 (66.7%) であり、情報源は友人とメディアに偏っていた。

性交について今後知りたいことで多かったのは「男性と女性の心理や行動の違い」女子 51 名中 22 名 (25%)、「月経や性器など体に関すること」20 名 (22.7%)、「妊娠や出産について」16 名 (18.2%) であった。最も少なかったのは、「避妊法」6 名 (11.8%) であった。

性交の経験がない者及び無回答の者を除いた 14 名の内、8 名 (57.1%) が性交時に性感染症の可能性が「非常に気になる」又は「少しは気になる」と回答した。6 名 (42.8%) が「あまり気にならない」「気にならない」であった。妊娠の可能性については 3 名 (21.4%) が「あまり気にならない」と回答した。判断の基準となる性交に関する正確な情報や知識の未熟さがみてとれる。

性交の時にいつも避妊しない又は避妊したときと避妊しないときがあると答えた女子に理由を尋ねたところ、「避妊を言い出せない」が 5 名、「準備していないことが多いから」が 4 名、「相手に断られる」が 2 名だった。避妊や性感染症について重要性の認識の甘さに加えて、従属的で感情まかせであることが、予防行動を妨げる原因となっていることを示唆していた。性的自己決定ができる力をつけるよう働きかけることが必

要といえる。

表2 性交についての女子の考え方や価値観 (複数回答)

| 項目 | 人数 | % |
|----------------------|----|------|
| あなたにとって性交とは | | |
| 愛情表現 | 31 | 35.6 |
| コミュニケーション | 9 | 10.3 |
| 安らぎ | 3 | 3.4 |
| 子どもを作るための行為 | 21 | 24.1 |
| 快楽 | 5 | 5.7 |
| ストレス解消 | 1 | 1.1 |
| 義務 | 4 | 4.6 |
| 不快・苦痛 | 1 | 1.1 |
| 自分とは関係ないもの | 12 | 13.8 |
| 性・性交の情報を誰から得るか | | |
| 友達・先輩 | 35 | 68.6 |
| 学校 | 14 | 27.5 |
| 親 | 5 | 9.8 |
| インターネットなど | 10 | 19.6 |
| 雑誌 | 7 | 13.7 |
| テレビ | 5 | 9.8 |
| 特に得たいとは思わない | 5 | 9.8 |
| 性について今後知りたいこと | | |
| 男女の心理・行動の違い | 22 | 43.1 |
| 月経・性器など体に関して | 20 | 39.2 |
| 妊娠や出産について | 16 | 31.4 |
| 性感染症について | 15 | 29.4 |
| 性交の方法 | 7 | 13.7 |
| 避妊法 | 6 | 11.8 |
| その他 | 2 | 3.9 |
| 避妊しないときがあると回答した6名の理由 | | |
| 準備していない | 4 | 66.7 |
| 多分妊娠しないと思う | 2 | 33.3 |
| 避妊を言い出せない | 5 | 83.3 |
| 相手に断られる | 2 | 33.3 |

「高校生が性交すること」を 64.7% が受容していた。「愛情がなくても性交すること」「金銭の授受のある性交」「恋人以外の人との性交」に関しては 5 人に 1 人受容していた。

表3 女子の性に関する考え方や価値観

| | 良い | どちらか というと 良い | どちらか というと 悪い | 悪い |
|------------|----|--------------------|--------------------|----|
| 高校生の性交 | 20 | 13 | 12 | 6 |
| 愛情がない性交 | 8 | 3 | 9 | 31 |
| 金銭の授受のある性交 | 2 | 6 | 8 | 34 |
| 恋人以外との性交 | 5 | 4 | 3 | 38 |

女子の 29.4% が「男は外で働き女は家庭を守るべき」、64.7% が「子供が小さい内は母親は仕事を持たず家にいるべき」であると考えていた。

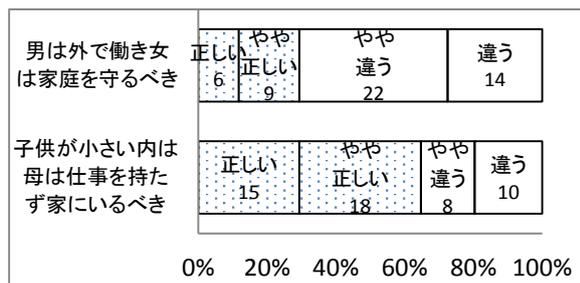


図3 女子の性に関する考え方や価値観

3. 6 デートDVに関する意識

自分や、周囲の学生にデートDVがおきてもデートDVであると自覚できないことや、デートDVをしたりされたりすることにつながる意識を学生がどの程度持っているかを測った。デートDVにつながる危険で間違った意識(考え方や価値観)を容認している学生が一定数いた。

36.0%の女子が「望んでいないのに性交してしまう人なんていない」と考えていた。性交を求められて嫌だったのに応じて傷ついても、自分も望んで性交したのであり強要した相手に問題はないと認識してしまうことが考えられる。

親密な関係での暴力に関する意識について尋ねる問いでは、「好きで付き合っている人から暴力を振るわれる人はいない」が58.5%と特に支持される率が高かった。女子が、恋人間の暴力は起きにくいことだと考えていることを示しており、暴力がおきても暴力であると自覚することが難しいことを示唆している。

暴力容認の意識について尋ねる問いでは、37.3%の女子が「暴力をふるったとしても、謝ったら許してあげべき」と考えていた。一般的に、謝られたら許すのは良いこととして学校や家庭でも教えられている。DV加害者は暴力後に謝っても暴力を繰り返すことが多く、謝ったら許すべきとの考えに付け込んだ行為だと言える。どんなに好きな相手でも暴力は間違っているし、許されない行為であること、暴力をふるっても相手が謝ったら許すべきという考え方が危険であるという情報が必要だろう。

束縛に関する意識について尋ねる問いでは、5人に1人が付き合うようになったら束縛してもよいという、どの項目の考えも支持していた。暴力を受けても、相手の希望に添えなかった自分が悪いと認識することが考えられる。

表4 デートDVに関する意識

| 女子の社会的性差に関する意識 | 正しい | やや正しい | やや違う | 違う |
|---------------------------------------|-----|-------|------|----|
| 女性の方から避妊してなんて言ったら嫌われると思う | 2 | 8 | 13 | 28 |
| 性交を求められたら女性は愛情があるなら少タイヤでも応じるべき | 0 | 5 | 16 | 30 |
| 男性が暴力的・攻撃的なのは男らしい | 0 | 0 | 13 | 37 |
| 望んでいないのに性交してしまう人なんていない | 5 | 13 | 13 | 19 |
| 女子の親密な関係での暴力に関する意識 | 正しい | やや正しい | やや違う | 違う |
| 暴力をふるわれるのはふるわれるほうに理由があるから | 1 | 7 | 23 | 20 |
| デート相手からの暴力なんておきたとしてもきっとそのときだけのこと | 1 | 8 | 21 | 21 |
| 好きで付き合っているから暴力をふるわれるのはめったにないこと | 12 | 18 | 11 | 10 |
| 女子の暴力容認の意識 | 正しい | やや正しい | やや違う | 違う |
| たとえ暴力をふるったとしても、ちゃんと謝ったら許してあげるべき | 6 | 13 | 22 | 10 |
| ドラマやマンガで恋人が思わず手をあげるのは嫉妬や愛情表現なら暴力ではない | 2 | 6 | 13 | 30 |
| 相手をおとしめるようなことを言ったリバカにしたりどなったりは暴力に入らない | 0 | 7 | 19 | 25 |
| 女子の束縛に関する意識 | 正しい | やや正しい | やや違う | 違う |
| 付き合うようになったらふたりの気持ちや考えは同じでなければならない | 2 | 8 | 24 | 17 |
| うんと親しくなれば相手が嫌がることをしたり行動をしばってもしかたがない | 0 | 6 | 14 | 31 |
| 数回デートしたら「相手は自分のものだ」と思っている | 0 | 8 | 18 | 24 |

3. 7 デートDVに関する意識の相関分析

女子の性に関する考え方や価値観の各項目の関係性を調べたところ多くの有意な相関が見られた。「愛情がなくても性交すること」は問題ないとする回答と「お金をもらったりあげたりして性交すること」は問題ないとする回答は有意な正の相関(0.82)があった。「愛情がなくても性交すること」と「恋人がいる人が、恋人以外の人と性交すること」も有意な正の相関(0.83)があった。「お金をもらったりあげたりして性交すること」と「恋人がいる人が、恋人以外の人と性交すること」は有意な正の相関(0.88)があった。

学力下位校の生徒において性経験率が高く、初交年齢が低い¹⁰⁾といわれている。性行動の背後にある女子の性に関する考え方や価値観を分析することで、学業を優先し性行動抑制する取り組みに向けて認識の改善をはかることが望まれる項目が明らかになった。

表5 女子の性・性交に関する考え方

| | 1 | 2 | 3 | 4 |
|------------------------|---|------|------|------|
| 1 高校生が性交すること | | 0.49 | 0.43 | 0.28 |
| 2 愛情がなくても性交すること | | | 0.82 | 0.83 |
| 3 金銭の授受のある性交をすること | | | | 0.88 |
| 4 恋人がいるが、恋人以外の人と性交すること | | | | |

DVの要因として考えられる「男らしさ」「女らしさ」や性役割分業へのこだわりなどの意識との関係性が明らかになった。特徴的な質問の結果を以下に示す。

「男は外で働き、女は家庭を守るべき」と有意な正の相関があったのは、「子どもが小さい内は、母親は仕事を持たず家にいるべき」(0.63)、「数回デートしたら相手は自分のものだと思っていい」(0.43)、「暴力をふるわれるのはふるわれるほうに理由があるからだ」

(0.43)、「親しくなれば相手が嫌がることをしたり行動をしばったりはしかたない」(0.46)、「相手をおとしめるようなことを言ったり、バカにしたりどなったりするのは暴力のうちに入らない」(0.42)、「男性に性交を求められたら、女性は愛情があるなら少タイヤでも応じるべき」(0.57)、「女性の方から避妊してと言ったら相手に嫌われると思う」(0.59)であった。

「子どもが小さい内は、母親は仕事を持たずに家にいるべき」と有意な正の相関があったのは、「男は外で働き、女は家庭を守るべき」(0.63)以外では「好きで付き合っている人から暴力をふるわれる人はいない」(0.4)、「数回デートしたら相手は自分のものだと思っていい」(0.44)、「男性に性交を求められたら、女性は愛情があるなら少タイヤでも応じるべき」(0.42)、「女性の方から避妊してと言ったら相手に嫌われると思う」(0.4)であった。

「好きで付き合っている人から暴力をふるわれる人はいない」と有意な正の相関があったのは、「望んでいないのに性交してしまう人はいない」「たとえ暴力をふるったとしても、謝ったら許してあげるべき」であった。

表6 社会的性差とDV容認との相関

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 |
|--|---|------|------|------|------|-------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|
| 1 男は外で働き、女は家庭を守るべき | | 0.63 | 0.35 | 0.36 | 0.10 | 0.43 | 0.43 | 0.46 | 0.38 | 0.42 | 0.57 | 0.30 | 0.59 | 0.36 | 0.31 |
| 2 子どもが小さい内は、母親は仕事を持たず家にいるべき | | | 0.40 | 0.00 | 0.23 | 0.44 | 0.39 | 0.30 | 0.15 | 0.21 | 0.42 | 0.20 | 0.43 | 0.23 | 0.08 |
| 3 好きで付き合っている人から暴力をふるわれる人なんてめったにいない | | | | 0.17 | 1.00 | 0.13 | 0.24 | 0.16 | 0.89 | 0.19 | 0.29 | 0.33 | 0.22 | 0.36 | 0.41 |
| 4 デート相手からの暴力なんておきたとしても、そのときだけのこと | | | | | 0.18 | -0.06 | -0.04 | 0.01 | 0.01 | -0.02 | 0.13 | 0.02 | 0.14 | 0.02 | -0.19 |
| 5 望んでいないのに性交してしまう人なんていない | | | | | | 0.34 | 0.41 | 0.20 | 0.21 | 0.40 | 0.25 | 0.23 | 0.24 | 0.12 | 0.00 |
| 6 数回デートしたら「相手は自分のものだ」と思っている | | | | | | | 0.51 | 0.42 | 0.45 | 0.61 | 0.36 | 0.53 | 0.52 | 0.49 | 0.13 |
| 7 暴力をふるわれるのはふるわれるほうに理由があるからだ | | | | | | | | 0.62 | 0.52 | 0.75 | 0.41 | 0.52 | 0.54 | 0.38 | 0.05 |
| 8 親しくなれば嫌がることをしたり行動をしばったりはしかたない | | | | | | | | | 0.52 | 0.70 | 0.38 | 0.50 | 0.30 | 0.22 | 0.01 |
| 9 男性が暴力的・攻撃的なのは男らしい | | | | | | | | | | 0.63 | 0.35 | 0.49 | 0.36 | 0.22 | 0.09 |
| 10 相手をおとしめるようなことを言ったりバカにしたりどなったりは暴力に入らない | | | | | | | | | | | 0.31 | 0.64 | 0.56 | 0.33 | 0.17 |
| 11 男性に性交を求められたら、女性は愛情があるなら少タイヤでも応じるべき | | | | | | | | | | | | 0.43 | 0.32 | 0.42 | -0.07 |
| 12 付き合うようになったら、ふたりの気持ちや考えは同じでなければならぬ | | | | | | | | | | | | | 0.37 | 0.43 | 0.00 |
| 13 女性の方から避妊して言ったら相手に嫌われると思う | | | | | | | | | | | | | | 0.61 | 0.34 |
| 14 ドラマやマンガで恋人が思わず手をあげるのは、嫉妬や愛情表現なら暴力ではない | | | | | | | | | | | | | | | 0.23 |
| 15 たとえ暴力をふるったとしても、ちゃんと謝ったら許してあげるべき | | | | | | | | | | | | | | | |

4. あとがき

デートDVの被害経験のある女子は10人に1人で、冒頭に述べた内閣府の調査結果と一致している。デートDVは一部の学生が抱える問題ではなく、全ての学生に関係のある問題であるということが、当調査結果からも言える。また、デートDVにつながる危険で間違った意識(考え方や価値観)、性・性交に関する間違った意識を高い割合でもっていることが分かった。各項目の関係性を調べたところ、危険で間違った意識や性感染症や避妊についての不適切な知識や考え方を持つ女子ほど、性・性交に関する間違った意識を持っていた。恋愛関係において女性は男性に従属的になる役割があると認識する女子ほどデートDVに対する問題意識が低かった。そして、デートDV被害経験がある女子のほうが、その考えを支持する傾向のあることが

明らかになった。性交は男性にリードされ女性は従うものだという認識のため、避妊して欲しい・性交したくないといった意識意思表示をしないまま DV 被害を受けることが考えられる。

以上のことから、デート DV 未然防止のためには、DV に関する知識だけではなく性や性交に関する正確な知識も含めたデート DV につながる危険で間違った意識を改めるきっかけを提供する必要がある。

性的な DV 被害体験のある女子が確認されたことから、デート DV の加害者にも被害者にもならないように男子は何が性暴力になるのかしっかり自覚できるよう、性的自己決定を尊重することを学ぶ教育が急務であると指摘できる。

性・性交に関する主要な情報源は、身近な同年代の友達・先輩であったが、その内容は必ずしも正確ではない。性情報の氾濫している環境の中で、性に関して適切に理解し、行動できるようにすることを課題とし、相手を思いやり望ましい人間関係を構築することを関連づけて指導する必要がある。2 年男女対象のデート DV 未然防止講演会の実施後には、DV に関する認知度が上昇することが明らかになっていることから、DV 予防啓発教育は一定の効果があったといえる。今後、性に対する理解を深め平等な男女関係の正しい認識をもてるような教育が望まれる。

商船高等専門学校の女子は、学生 6 人中 1 人程度である。今回、少数派である高専女子のデート DV の現状の一端が明らかになった。今後、健康相談においてもより実践的な被害者支援方法や加害者の暴力克服の支援方法、デート DV の認知や防止のための取り組みを推進していく必要があると考え、課題としたい。

参考文献

- [1] 内閣府男女共同参画局：男女間における暴力に関する調査報告書、(2012)
- [2] 横浜市市民活力推進局：デート DV についての意識・実態調査報告書、(2008)
- [3] 広瀬裕子：学校の性教育に対する近年日本における批判動向—「性教育バッシング」に対する政府対応—、専修大学社会科学年報第 48 号、193-211、(2014)
- [4] 北海道学校保健審議会：生徒の性に関するアンケート調査のまとめ、北海道教育委員会健康体育課調査報告、(2008)
- [5] (財)兵庫県ヒューマンケア研究機構家庭問題研究所：青少年の性意識と性行動に関する調査研究報告書、(2002)
- [6] 鈴木佳代：現代高校生の生活と性行動、北海道大

学大学院教育学研究科紀要第 90 号、(2003)